

献利用以上に血となり肉となつて活かされているように考える。それはともかく本書のはじめに、少しでよいから、著者の既往卅年の研究成果を組立てるべき著者独自の研究の方法がのべてはしかつたのは、あながち評者一人の勝手な注文でもないように思う。(B 6 二六六頁、定価三〇〇円、日本地名学研究所発行)

——藤岡謙二郎——

Li Chi : The Beginnings of Chinese Civilization.

1957. University of Washington
Press, Seattle, U.S.A.

(李济著「中国文明的開始」)

著者の李济氏については、今更紹介するまでもない程に、中国の考古学界の最高の研究家の一人である。一九二六年に山西省夏县西陰村で、著者が行つた彩陶遺蹟の発掘は、中国人による中国の最初の科学的な発掘であつた。その後、中央研究院歴史語言研究所考

古組のリーダーとして、安陽の殷虚、山東省城子崖などの発掘を主宰すると共に、これらの発掘によつて得た資料を駆使して多彩な研究活動を行つてゐる。特に殷虚の遺物を中心とした研究が数多く発表されているのは、中央研究院が、実際に発掘を行つた期間が、そのまま殷虚の発掘の期間であつたことを考えるならば当然である。青銅器(容器・利器とも)、陶器、石器、人骨の形態的な研究など、その範囲は非常に広い。勿論こゝいつた各々の研究に対して、見解を異にする学者も多いであらう。然し、こと殷虚の研究に限る限りは、実際の発掘に従事したこと、或いは資料を直接手にして研究している点は、何んといつても著者の長所である。而かも、こゝいつた各種の資料を綜合した文化全体の上から遺物を考えるという態度は、考古学者のなかでは数少ない一人である。今一つ著者の研究の特色をなしているのは、遺物を数量的に取りあつかうという方法である。発掘した遺物の報告に、そのスケールや重量などを記載することは、普通行われることであるが、さて遺物を集めて研究するとなると、形態的な——

数字が無視され勝ちである。この点李济氏の研究は、独特な方法をもつてゐる。例えば、葬器の研究では、器の外形的なスケールとともに、その容量が常に注意され、容量の比率によつて各種の銅器の一組としての組合せを考え、更に、それから銅器の用途を考えようとする。陶器の研究でも、その外形的な相互関係とともに、成分を化学的に分析して製陶の技術を考える。こゝいつた方法は、中国を始め、少くとも中国考古学に関する限りは、余り行われなかつた。こゝいつた点では、新しい研究方法を拓いた人と言つてもよいであらう。

こゝの「中国文明的開始」は、以上のように、中国考古学の最も優れた研究者の一人である李济氏が、一九五四年ロックフェラー財団の招きで、アメリカとメキシコを訪問した際行つた三つの講演をまとめ、補足して出版したものである。従つて次の三つの部分から成り立つてゐる。

I. Digging Up China's Past, II. Origin
and Early Development, III. The Bronze
Age of China.

第一の Digging Up China's Past は、人

類学的に中国文明の中心舞台を考え、殷の文化をその舞台の上で考えようとする。中国に於ける人類の生存は、シナントロプス・ペキネンシスが最も早いわけであるが、しかし、形態的に現在の中国人と結びつくのは、同じ周口店の山頂洞から発見された、旧石器時代人——山頂洞人からである。そしてその特徴はシャベル状前歯によつて代表される。そしてこの人種はモンゴロイドであり、新石器時代から殷を通して現在まで及んでいる。そして中国人の祖先はこのモンゴロイドであるとともに、このモンゴロイドはウラル山脈の東に展開している。かくして中国文明の大きな背景が設定される。次に新石器時代になると、先づ彩陶があらわれる。これは東は太行山脈、西は潼関に至る黄河流域に集中して出現する。これに対して東の山東を中心として黒陶の文化がある。安陽の後岡で発見された層位関係からすると、彩陶文化が古く、黒陶文化がこれに次ぎ、その後に殷の文化があらわれる。而かも、殷の文化は、黒陶の文化に係があるように見える。然しここで注意しなければならぬのは、黒陶文化と殷の文化とは六つの大きな相違点がある。1、陶器の

製作に新しい発展があること——器形の上では九つの新しい形式が出現する。2、利器・葬器の青銅による鑄造。3、高度に発達した文字の使用。4、墓室を作つて埋葬する方法と人間を犠牲に使用すること。5、戦車——ヤリオットの使用。6、進歩した石彫品の存在。この六つは、いづれも黒陶文化には見られないものである。従つて殷の文化を考える際には、この六点を綜合して考えなければならぬ。勿論殷の文化には、これに先立つ新石器時代の文化の伝統がうけつがれている。——これは人種的に見ても当然である。然し彩陶の文化とは全く相違する様相を示しているし、また黒陶の文化とも完全には一致しない。而かもこの六つの点で殷の文化の先行形態は、この東アジアでは見つけれないとすると、当然、他の地域の文化との接触を考えなければならぬ。

以上が第一の講演の要旨である。第二の講演は、この問題を更に検討するために行われたもので、各種の遺物を個別的に、他の文明と比較しようとするものである。例えば、内底中央に垂直に取つ手をつけた陶壺は、その形態のみを見れば、モヘンジョ・ダロやジ

ヤムデット・ナスルの同様な壺と類似する。これは西方の文化との接触を示すかもしれない。或いは、饕餮文で装飾した骨製の柄は、その文様の配置方法で、カナダの西北海岸に住むエスキモーのトーテム・ポールと類似する。従つて、世界の遠隔地の間の類似は、長い期間の間に何かの文化的接触があつたであろうことを示しているかも知れないが、然しこういった事を考えるには、その二つの文化の間に介在する地域の研究が進まなければ、確実ではない。それならば、中国の東部や南部との関係はどうであらう。例えば侯家莊と小屯とから出土した、石製の人間の坐像がある。そのなかで小屯から出た坐像の文様は、黒陶文化のものに極めて類似し、またその坐り方は、黒陶文化の地域に歴史時代に入つてから住んでいた東夷の習慣と同じである。然し、衣服そのものは、東方系のものとは非常に相違がある。従つて簡単に東方の要素——黒陶文化の要素のみを殷文化の基盤に置くことは出来ない。また動物などには南方の要素が強いが、また北方的なものもある。或いは米の栽培においても、米そのものは南方のものであるが、その栽培方法は当時には黄河流域

で、ずつと進歩していると考えられる。従つてこういう面でも、簡単に、殷の文化は南方系ということは出来ない。第一の講演でとりあげた六つの要素のうち、青銅器は最も人目をひくが、その鑄造の問題をとりあげても、銅や錫の鉱石を遠くから運ぶ必要はない。安陽を中心とした三百料の範圍で需要を満たし得る——これは天野元之助博士の説によつたものである。而かも、殷の文化に先行する時代の中国には銅器はなく、西方との接触という点でも地域的なギャップがある。従つて、先の六点を合せた殷の文化は多様な外文化との接触を一方で暗示しながら、而かも独特な性格をもっている。故に殷文化に先立つ時代

を中国のなかに、求めることが、第一の問題となつて来る。こうして提起された問題が、第三の「The Bronze Age of China」の出发点となるわけである。

第三の講演は、以上の問題を考察するため、まず文化の舞台を安陽小屯の殷虚に限定する。殷虚の發掘によると、小屯の層位関係は、次の表のようになる。

殷虚には、紀元前一三八四年に殷庚が遷都して来る以前に、すでに殷の文化をもつた住民(表の2)がやつて来ていた(殷庚遷都の年は董作賓氏の説による)。この前後二つの時代を区別する方法は、夯土という方法である(筆者記堅穴住居址のかわりに、地表に土

をつき固めた床をつくり、家屋を建てる方法である)。この先王朝時代の殷の遺蹟には、一般的に見てこの方法はないということが出来る。従つて夯土層より下層の堅穴から出土するものは、先王朝時代の遺物と考えられ、また更に古い黒陶の文化とは明らかに相違して、殷の特色をもつものである。こうして、王朝時代の殷に比較して、古い段階の殷文化を見出したわけであるが、すでにこの段階に少数ながら青銅器がある。この青銅器と、王朝時代のものと比較して銅器の形態的変遷をもたどるわけであるが、これには特殊な祭器である彝器よりも、日常に使用したであろう利器を標準とするほうが確実である。さらに小屯から發見された二つの時代の銅範を比較して、鑄造技術の進歩も同じようにあつてけることが出来た。然し、青銅技術の起源を考えると、先王朝時代の前を考える必要があるが、これにはもつと広い地域が科学的に調査されなければならない。ともかく青銅の技術の真の意味の起源は不明であるが、殷虚の發掘と研究とによつて、先王朝時代の文化にはすでに、鑄造が開始されていることが確かめられ、それ以後西周から戦国時代にか

Periods	Cultural Characteristics	Stratifications	Dating
1. Premetallic	Black Pottery	Bottom layer (on the virgin soil)	Late Neolithic
2. Predynastic Shang	Early Bronze	Above Black Pottery, below hang-t'u (夯土)	Up to about 1384 B. C.
3. Dynastic Shang	Middle Bronze I	Hang-t'u Period	ca. 1384-1111 B. C.
4. Post-Shang	Middle Bronze II	Post-hang-t'u	1111 B. C.

Period	Type Site	Characteristic Features	Chronology
Early Bronze	Hsiao-t'un* 2 (YH379)(Anyang)	Open-hearth casting Knives with one side flat	Predynastic Shang*
Middle Bronze I	Hsiao-t'un 3 (E 16) Hou-chia-chuang* royal tombs (Anyang*)	Valve molds and internal molds Simple-bladed <u>Ko</u> (戈) Big Bronze vessels	Dynastic Shang ca.(1384-1111 B. C)
Middle Bronze II	Hsin-ts'un* tombs (Chün Hsien*)	Method of casting same as above Curved-bladed <u>Ko</u> (戈) with developing <u>hu</u> (胡) Tetrapods disappeared	Western Chou*
Late Bronze	Shan-piao-Chen* tombs(Chi Hsien*) Liu-li-ko* tombs(Hui Hsien*)	<u>Ko</u> of "Kao Kung Chi*" type with sharpened <u>nei</u> (內) <u>Chi</u> (戟)	Eastern Chou

* Hsiao-t'un 小屯, Anyang 安陽, Shang 商=殷, Hou-chia-chuang 侯家莊, Hsin-ts'un 辛村, Chün-Hsien 渚泉(河南省), Chou 周, Shan-piao-chen 山彪鎮, Chi-Hsien 汲泉(河南省), Liu-li-ko 琉璃閣, Hui Hsien 輝泉(河南省), Kao Kung Chi 考工記(周礼)

けて、青銅器は鑄造技術・形態ともに発展するのである。これが上の表である。

以上において大体の要旨を紹介した。ここに書かれている殷を中心とした中国古代文明の概観は、はじめのべたように、長い研究期間とすぐれた業績を発表した李濟氏の、古代観をまとめたものということが出来る。その意味で李濟氏の個々の論文には、背後にあつてあらわれない考えが豊富に語られており、また殷文化の特質を全体として把握するものである。従つて、この書物は、専門の考古学者にとつては、著者の幾多の論文を全体として検討する際には——単に氏の論文のみでなく、殷文化の意義を考えるにも必読の書であるとともに、今後新しく中国の古代史——先史時代をも含めて——の研究に従事しようとする人には、殷の文化を中心とした多方面の問題点を整理してある点で、よき入門書となるであらう。

著者の中央研究院の大多数の人が大陸を去つたのも、中国科学院考古研究所を中心とした幾多の発掘によつて新しい事実が明らかになつた。例えば彩陶から黒陶へ、更に殷へという一貫した陶器の発展が河南を中心とした

地域で行われたらしいことをあげることが出来る。こういった点では李済氏の使用する資料が限られたものであるだけに、殷の文化の多様性を認めつつも、やはり西の彩陶に対して、対立するものとしての東の黒陶の影響を強く考えようとする点は、訂正を必要とするであろう。然し銅器だとか、甲骨文などの出現のもつ意義は、鄭州の殷の遺蹟の発見によつて、小屯より多少さかのぼることが明らかになつたけれども、而かも鄭州のこれらの遺物がやはり完成形しか見当らないことを考えると、依然として殷文化の大きな問題として残されているのである。そういった点で、李済氏の提出した殷の六つの要素の組合せが、何時何処で、どのような理由から出来上つたという問題は、研究者が常に考えていなければならない問題である。最後に、本書にはすぐれた殷虚遺物の写真が豊富に揃えられていることを附記しよう。

なお本書には多数の参考文献があげられているが、その目録に見られない李氏の研究で、本書と関係の深いものをあげておく。

殷虚器物甲編陶器上冊一九五七年、台北
殷虚白陶發展之程序（歴史語言研究所集刊第

二十八本下冊）

殷虚有刃石器圖説（中央研究院歷史語言研究所集刊第二十三本下冊） 跪坐蹲居与箕踞

（歴史語言研究所集刊第二十四本）

Notes on some metrical characters of
calvaria of the Shang Dynasty excavated
from Hovchachuang Anyang（中央研究院
院院刊第一輯、一九五四年、台北）

（本文五九頁圖版五〇）——伊藤 道治——

（八六頁のつづき）

山村性格の推計学的考察

佐々木清治

——大井川上流井川村——

陸前大島の半農半漁構造

大村 肇

日本沿海集落の一ケース

山岡 政喜

志摩半島真珠養殖業における工業立地的

井上 啓男

考察

伊藤 久雄

オホーツク海沿岸の水産業

伊藤 久雄

以西遼洋底びき網漁業根拠地の変遷

土井 仙吉

新漁法の導入によつて完全組合自営を

採用した漁村

新漁法の導入によつて完全組合自営を

採用した漁村

手漉和紙工業の残存と立地

藪内 芳彦

水車動力から近代の動力への推移にみる

小池 洋一

れた二三の特相

末尾 至行

信州諸盆地における工場工業の受容

千葉 徳爾

江東地区工業の地域構造

菊地 一郎

東北地方の行商活動

高橋 幹雄

宗教受容における地域性の問題

徳久 珠朗

——群馬県のキリスト教

堀川 侃

近代交通機関の地域的類型

岸本 治子

サンパウロにおける日本人人口の変貌

金子 廉

啓蒙時代の地理意識

小堀 巖

——ロバートソンと印度

イランにおけるカナットについて

小堀 巖

考古学関係

和歌山市大谷・大谷古墳の調査

十二月十五日——一月十三日。京都大学

樋口隆康助教授を主査とし、考古学教室

員、国学院大学金谷克巳氏が発掘に参加し

た。長さ二・九米、幅一・六米の凝灰岩製

組合家形石棺を主体とする前方後円墳で、

棺内はすでに盗掘されていたが、金・銀・

金銅製装身具、玉類、挂甲、直刀などの残

片を残し、棺外の両端部からは、木箱に収

めた金銅あるいは鉄製の馬具、短甲、矛な

どが発見された。